

 書評

 兼本浩祐, 丸 栄一, 小国弘量, 池田昭夫, 川合謙介 編
臨床てんかん学

田中達也

てんかんは、2000 年以上の昔から難治の病として知られており、根本的な治療法の模索が現代までも続いている極めて特殊な病態でもある。世界の人口は約 72 億 7,000 万人と報告されている（『世界人口白書 2014』より）。人口の約 0.8% がてんかんに罹患していることから、全世界には、約 5,810 万人以上のてんかん患者がいることになる。てんかんは治療費の面からも、各国の行政上の政策としても、非常に重要な課題と考えられている。

日本の現在の人口は 1 億 2,000 万人強となり、約 100 万人の患者が推定されているが、80% 以上の症例では、きちんとした治療により発作はコントロールされており、通常の社会生活が十分に可能である。しかし、てんかんの大きな問題点は、偏見である。このため、学校生活、雇用、人間関係にさまざまな問題があり、社会的な弱者に対しての、法制度の整備も十分とは言えない状況にある。2011 年と 2012 年に起きた、てんかん患者による悲惨な交通事故は、てんかん治療の社会的な問題の複雑さ、てんかん治療の重要性を再認識させられた。しかし、一面では、法制度整備の盲点を浮き上がらせたとも考えられる。

このたび、医学書院から兼本浩祐先生（編集者：国際抗てんかん連盟てんかん精神医学委員会委員長）らによる『臨床てんかん学』が刊行されたのは、実に時の要求に応えたものと言える。本書は、日本を代表するてんかん専門の基礎および臨床の研究者による分担執筆で構成されている。てんかんの基礎医学、症候学、診断学、薬物治療および外科治療、てんかんの社会的問題、日本てんかん学会および日本神経学会のてんかんガイドラインなど、この一冊にてんかんに関する最新のエッセンスが全て網羅されている。

始めに、てんかんメカニズムを理解するために必要で、しかも基本的な疫学、神経生理学、病理学が

詳細に説明され、疾患各論では各分野の第一線で最も活躍されている研究者が、初心者によく分かるように、分かりやすい構成を心がけて詳細かつ丁寧に説明されている。しかもこのため、初心者はもちろんのこと、実際にてんかんを専門に治療している医師にとっても、各項目の豊富な引用文献を検索することにより、より高度な知識をリフレッシュすることが可能で、座右の書の一つになるものと思われる。本書は、てんかんを診療する内科、小児科、神経内科、脳神経外科や精神科の医師にとっては、必携のエンサイクロペディアと位置付けられる。さらに、てんかん患者をケアする、看護師、介護職員、患者家族にとっても、てんかんの基本的な介護と治療の重要性を理解するために必要なバイブルとなろう。

2015 年は、てんかんに関する大きな転機が訪れた。世界保健機関 (WHO) が、ジュネーブでの総会で、「てんかん医療の強化に関する決議」を採択したことである。この決議により、今後 10 年間、世界各国の厚生省、厚労省に、てんかんの治療、研究、創薬、一般社会への啓蒙を進めるように進言することが承認された。わが国でも、てんかんに対する新たな取り組みとして、2015 年から厚労省が、てんかんネットワークの構築のための、てんかん拠点病院の指定を開始している。

本書が最新の「てんかん学」を網羅していることから、てんかんに苦しむ多くの患者を救うために奮闘している多方面の関係読者の愛読書となるものと期待している。

（旭川医科大学名誉教授/国際抗てんかん連盟 (ILAE) 副理事長）

●B5 688 頁 2015 年 11 月 定価：本体 15,000 円＋税 医学書院刊